

京都大学	博士(文学)	氏名	須 藤 訓 任
論文題目	ニーチェの歴史思想 ― 物語・発生史・系譜学		
(論文内容の要旨) 本論文は19世紀ドイツの思想家フリードリヒ・ニーチェの、歴史をめぐる哲学思想を考察する論文である。歴史にかんするニーチェのテキストは比較的少数であるため、彼の思想が歴史と関係付けられて論じられることはあまり多くない。また、歴史にかんするニーチェの思想は、初期の『悲劇の誕生』から晩年の『道徳の系譜学』や『ヴァーグナーの場合』まで、基本的立場の変遷につれてさまざまに変化していて、一貫性を欠いているようにも見える。本論文の主題は、この思想的変遷の過程を、変遷の内在的理由とからめて追跡することから、そこに歴史に対する「思い込み」を自覚化し、その問題点を摘出し解決の糸口を見出そうとしていく経過を突きとめるとともに、この過程が「歴史」認識の問題性の深化の過程であることを明らかにすることである。 本論文は全六章からなる本論の部分と、それを補う数篇の補論とから構成されている。本論の部分の議論の筋道は以下の通りである。 (第一章) まず処女作である『悲劇の誕生』に示された歴史観が分析される。それは典型的な一つの「大きな物語」として提示された歴史であり、壮大な勸善懲惡の物語である。人類の文化は「ディオニュソス的なもの」と「アポロンのなもの」という「自然の芸術衝動」の「弁証法的」抗争と発展を通して紀元前五、六世紀にギリシャ古典悲劇の完成という形で一つの頂点を迎えた。しかし、論理の怪物ソクラテスの登場とその感化に染まったエウリピデスの手で古典悲劇は自死に追い込まれる。そこでは形而上学的原理として自然の内奥に潜む「芸術衝動」に対する予感が閉ざされてしまう。論理によって、日常世界を越えた形而上学は放擲され、一切はこの世の表層の「知」に還元可能となる。 人類文化の精華としてのギリシャ悲劇を没落させたソクラテスは、その意味で「世界史の一大転換点」である。以降は哲学も芸術もソクラテスの敷いた路線を走らざるをえず、歴史は基本的に「ソクラテス主義」に牛耳られた「アレキサンドリア文化」の跋扈する場となり、それは近代世界にまで及ぶ。しかるに、近代に至って形而上学的原理への感受性が摩滅していなかったドイツにおいて、ルターの宗教改革以来、「ディオニュソス的なもの」が徐々に再び覚醒してゆき、思想としてはカントとショーペンハウアー、音楽としてはバッハからベートーヴェンをへて、19世紀後半の現在、ヴァーグナーの楽劇によって、悲劇は再生される。雌伏を余儀なくされていた悲劇の「霊」は再び覚醒し、世界史は再度文化的頂点に向かって歩を進める。			

『悲劇の誕生』の歴史観はこのように、いったん栄華を極めた善玉（悲劇）が悪賢い悪玉（ソクラテス）によって罨にかけられ、没落を強いられ、久しきにわたって辛酸を嘗めさせられるが、ついに時いたって、悪玉を退治し、かつての栄光を取り戻すというストーリーをなしている。この物語の支柱となっているのが、ショーペンハウアー流の形而上学なのであり、言い換えるなら、この形而上学の立場なしには上述のストーリーも成り立ちえないことをニーチェ自身、よく心得ていたということでもある。ニーチェは『悲劇の誕生』において、あえて形而上学を標榜したのである。

（第二章）この形而上学の標榜は1870年代後半では、崩れさってゆく。この崩壊に先立ち、歴史への反省と批判として「生に対する歴史の利と害について」（1874年）が書かれる。この書においては、過去に対していかにして「正義」を保持した判断を確保できるかという切実な問題意識の下で、重要な問題提起がなされている。それは、歴史的過去を裁くとはいかにして可能なのか、という問題提起でもある。裁きの困難さの自覚を通して、ニーチェは歴史をドラマとして構想するという「思い込み」から、形而上学批判の認識方法としての「歴史」の活用へと一大転換する。それは「物語としての歴史」という発想の下での思想的拘束にたいする自覚を深めていった末の転換である。中期ニーチェの代表作『人間的、あまりに人間的』（1878-80年）に表明された「思考の発生史」こそ、その形而上学批判の認識方法である。

（第三章）方法としての歴史という着想によって、ニーチェは道德批判の道に本格的に踏み出す。ヨーロッパの道德、すなわちキリスト教道德の起源とは何なのか。その起源はこの世を超えた形而上学的存在にあるとされてきた。しかし、道德の起源はそういう天下りの形而上学的原理を援用することなく、説明可能であり、道德は醜く利己的な人間心理の恥部によって編み出されたのだと理解することができる。「思発生史」とは道德や宗教・芸術といった、従来形而上学的仮説によって説明付けられていたものの起源を、あくまで此岸の平面に定位し、この世の人間の織りなす心模様のみによって解明しようとする試みである。歴史はもはや、世界史の一大ドラマとして構想されるのではない。むしろそういう構想を廃棄するためにこそ、「思考の発生史」が発動される。

だが、物語の粉碎とともに、歴史に関して長期の見通しをつけることがきわめて困難になってくる。なぜなら、長期的展望をこれまで支えていたのは、何らかの形而上学的原理であったのに対して、今やその無効が宣言されてしまったからである。とはいえ、形而上学的原理が無効化したことから、歴史の長期的展望が直ちに不可能になるという論理的必然性はない。むしろ、形而上学的原理の無効化から歴史の長期的展望の不可能性を帰結させるとしたら、それは依然として形而上学的発想に拘束されている証であろう。形而上学の存亡とは別次元で、歴史に関する長期的な視圏が十分可能なはずである。ニーチェの後期思想が課題としたのはこうした歴史の長期的視圏の回復であった。それはある意味では物語の復権ともなるはずであり、過去について

はまさに、形而上学的原理の出生からその必然的な瓦解までの物語としての「ニヒリズム」の思想として結実するであろうし、未来への眺望としては「よきヨーロッパ人」の構想として展開されることになるだろう。

(第四章)一見反形而上学的な姿勢に根深く巢食う形而上学的発想の自覚は他方で、ニーチェに「思考の発生史」に関してさらなる反省を促すことになった。それはほかならぬ「思考の発生史」を実践する主体とは何者なのかという反省である。そして、その結果として剔抉されたのは、その主体がキリスト教道德の主体であるという、ある意味で逆説的な結論であった。ここで、起源への問いとしての「系譜学」（「思考の発生史」の深化は後期ではこのように命名し直される）と道德批判とはねじれた形で絡み合う。そもそも翻って見るならば、起源の暴露が現在の批判に直結しなければならないいわれはない。価値の批判と起源の暴露とは、少なくともいったん切り離されなければならない。そのうえで、現在の価値の批判が試みられなければならない。だが、そのためには、現在の価値は相対化されなければならない、その相対化の遂行には、起源の暴露があらためて有効となることがありうる。そして現在の価値とは、その批判を試みる当の者の精神にも取り付き少なくともその一構成要素となっている以上、端的に外的立場からの批判は不可能なのであって、批判は批判者自身の自己相対化となり自己批判となるのでなければならない。とすれば、いかにしてその自己相対化は可能なのか。ニーチェ後期の『道德の系譜学』、とくにその第一論文を貫いている問題意識とはこのようなものである。

自己の相対化とは、自己に取り付きその構成要素となっている道德的価値の相対化でもある。そして、道德の相対化とはその道德以外の道德の存在ないし存在可能性を示すことでなければならない。その存在可能性を明示してくれるのが、「善悪」の語源学であり、それにより「善」という語の原義にはキリスト教的な利他性の埒外で「よき者」自身の自己肯定としての意味もあったことが明らかにされる。『道德の系譜学』にいう「騎士的価値評価様式」がそれである。こうして、キリスト教道德の唯一性が否定され、その相対化が敢行され、そこに批判の可能性が論拠付けられることになる。起源の探求は批判との峻別を踏まえた上で、批判に向けて役立てられてゆく。

(第五章)他方、「騎士的価値評価様式」が「僧侶的価値評価様式」以前に存在したことはいわば物証として語源学が活用されるときでも、そもそも現行の主流価値観である後者が前者に取って代わったというのが道德史の実相だということが言えるためには、そういう価値観の交代がそもそも可能であることが理論的に保証されねばならない。この理論的保証に取り組んだのが『道德の系譜学』第二論文であった。そこでニーチェが明らかにしようとしたのは、いわば「偶然」としての歴史である。道德的価値観の変遷は、価値観そのものに内在した「価値」の優劣によって決定されるのではない。あい拮抗する価値観の葛藤の帰趨を決定するのは、価値観からは独立している、外在的な力関係（それは「解釈」の葛藤にほかならない）であって、それは、物

理的な闘争に異ならない。しかし、だからこそ、キリスト教的道徳の勝利が「偶然」の産物であり、そうであるからには、反対に、キリスト教道徳の批判的超克の可能性も開けてくる。その意味で、物証としての語源学と「偶然」としての「歴史」観は、相互に支え合う関係にあるのである。ニーチェの「系譜学」の別名は「偶然としての歴史」にほかならない。

(第六章)歴史とは過去だけから構成されるのではない。歴史とは何より、現在を、同時代を、条件付け構成するものなのである。しかし、同時代は、同時代なるがゆえの固有な困難を、その認識の試みに突きつけてくる。『道徳の系譜学』の次著『ヴァーグナーの場合』でニーチェが取り組んだのは、現代（同時代）としての歴史に伴う認識の課題とその課題の成就の模索であった。それはすなわち、「同時代」としての「近代」の「本質」をいかにして感取し適確に形象化すべきかという課題である。同時代の本質は、無際限な多種多様の現象のうちにまぎれ、分散している。その分散から、本質は掬い取られ摘出されなければならない。その摘出には、本質のいわば集約となっている現象を、すなわち、本質を極端化して現出させている事例を探し当てるに如くはない。その事例を、ニーチェはヴァーグナーに突きとめた。ヴァーグナーこそ、筋金入りのデカダン、「典型的デカダン」だからである。ただし、「典型的デカダン」としてのヴァーグナーに対するこの洞察は、ニーチェ自身もまたデカダンであり、ヴァーグナーと「近代」の本質を共有しているという自覚に裏打ちされている。ヴァーグナーこそはその先鋭化現象であり、同時代を映し出す「拡大鏡」である。しかし、デカダンスという病の正体暴露が病の深化・昂進になってはならない。正体暴露を遂行する「哲学者」が同時に、猥雑なほどに陽気で、軽快で、いたずら精神にみちた(『ヴァーグナーの場合』の副題にある)「楽士」でなければならないのは、そのゆえである。そのとき病の暴露は、同時に治療法となる展望が開かれるであろう。

以上が本論文の内容の概略である。その主眼点は、後期ニーチェを取り扱った第四章から第六章において論究された、「伝統」と「同時代」の対自化という意味での「歴史方法論」にある。この「歴史方法論」およびその理論的裏付けとなる「偶然としての歴史」にこそ、歴史に関するニーチェの哲学全般において、最も注目すべき独自の思想的観点が展開されている。これがニーチェの歴史思想を包括的かつ詳細に分析した本論文の結論である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はフリードリヒ・ニーチェの、歴史をめぐる哲学思想を包括的に考察する研究である。これまで彼の思想が歴史と関係付けられて論じられることはあまり多くなかった。その理由は、歴史を正面から論じた彼自身のテキストが比較的少ないということもあるが、何よりも歴史に関するニーチェの思想が、初期の『悲劇の誕生』から晩年の『道徳の系譜学』や『ヴァーグナーの場合』まで、基本的立場の変遷につれてさまざまに変化していて、一貫性を欠いているように見えるからである。本論文の主題は、この思想的変遷の過程を変遷の内在的理由とからめて追跡することで、この過程が歴史に対する「思い込み」の自覚化であるとともに、「歴史」認識の問題性をめぐる哲学的反省の深化の過程であることを明らかにすることにある。

本論文はこの主題の下で、初期の「物語としての歴史」という形而上学的歴史観を脱したニーチェが、「思考の発生学」という中期の思想を経て、「伝統」と「同時代」の対自化という意味での「歴史方法論」の確立に至ったことを突きとめる。この「歴史方法論」およびその理論的裏付けとなる「偶然としての歴史」こそが、歴史に関するニーチェの哲学全般のなかで、最も注目すべき独自の観点が展開されている思想的核心である——これがニーチェの歴史思想を包括的かつ詳細に分析した本論文の結論である。

本論文は20年間のニーチェの思想的生涯全体にわたって、歴史に関する彼の思想的格闘について詳細に論述を展開したものであるが、このような包括的研究には、以下のような洞察と意義が認められる。

1) これまで、彼の全時期を通じた歴史思想の研究が少なかった理由は、全体を一貫した視点で内在的に読み解き俯瞰するために、どこに焦点を定めるべきかということが、不確定であったところにあると思われる。その視座を本研究では、「物語としての歴史」およびその批判的反省と克服に見定めようとした。前期思想にあっては歴史は「物語」的構造をなすとして暗々裏に前提され、その前提のもとに芸術哲学が繰り広げられていたのであるが、物語的歴史観の陥穽にたいして感度をたかめてゆき、深刻な反省がなされて、「思考の発生史」と命名されるような、認識の方法としての歴史という中期の着想に到達する。しかし、その方法としての歴史、すなわち学としての歴史を駆使する主体に関する問題意識が研ぎすまされてゆく後期において、この主体の正体が、ニーチェにとって批判的考察の対象に他ならないキリスト教道徳の主体たるものが逆説的にあぶり出され、学としての歴史の主体それ自身がその批判対象に本質において規定され拘束されていることが自覚されてくる。この自覚を踏まえたうえで、なおかつ歴史的探求の可能な姿を探る営みが「系譜学」と呼ばれたのであった。この意味で、後期ニーチェの歴史思想は、学の主体の被拘束性の自覚の深化と相即する形で展開され、そのうちで、単に過去という名の歴史が論究されるのみならず、同時代としての歴史に関しても、その正当な論述の条件の模索が行われ、その成果が最

晩年の『ヴァーグナーの場合』という書物となって結実した。『ヴァーグナーの場合』が「歴史」探求の書としてその内実が明確化されるのは、本研究をもって最初であるといつてよい。

2) 後期ニーチェの歴史思想の理解に関して、ここ数十年の哲学研究において大きな影響力を発揮してきたのは、ミシェル・フーコーの「ニーチェ、系譜学、歴史」(1971年)であった。同論文によれば、ニーチェの歴史探究(「系譜学」)は神聖にして由緒ある「起源」という発想がわれわれの歴史理解をいかに束縛し歪めているかを暴露し、その暴露とともに、歴史的分析はむしろ醜悪で猥雑にして卑小な「由来」という観点から考察されるべきであることを主張した。フーコーはニーチェのこの主張を歴史のイメージを逆転させたものとして重視し、自分自身の思想のうちにも積極的に織り込んでいった。このニーチェ理解の意義は大いに認められねばならないが、しかし、フーコーはニーチェ的「系譜学」を主として伝統的歴史観の解体として位置づけようとするがゆえに、中期ニーチェと後期との差異に十分な注意を向けようとはしない。フーコーにおいては、中期と後期が同じ路線にあると解されているために、上記のような、歴史的探求の主体における考察対象である歴史そのものによる被拘束性、という重要な問題への目配りが、抜け落ちていたのである。

3) 同じことは、ニーチェの歴史思想をめぐるもっとも新しい研究である Lars Niehaus: *Moral als Problem* (2010) にも窺える。Niehaus はニーチェを認識論的自然主義の立場に立つ歴史家として捉えたうえで、その歴史叙述の延長上に道徳批判を展望しようとする彼の努力を浮き彫りにしている。しかしこの研究でも、当の「自然主義的」歴史叙述がいかにして可能となるのかという点にこそ最大の問題があるという、ニーチェ自身においては鋭く意識されていた問題が十分に解明されていない。本論文はこの問題の焦点を絞るために、ニーチェに大きな影響を及ぼしたマッハなど、当時の「実証主義」認識論における主体の問題への取り組みに論究し、その問題の急所をはっきりさせることに成功している。この側面での考察は、認識論的主題としてきわめて重要であるばかりなく、ニーチェにかんする思想史的分析としても独創的であり、非常に高く評価されるべき成果である。

このように本論文は、最近の内外のニーチェ研究に比しても、もっとも細かい目配りのきいた、しかも独創性に満ちた研究であると思われる。ただし、この研究ではその主題を歴史への反省に限っているために、いわゆるニーチェの存在論の大きなテーマである「権力への意志」や「永劫回帰」の思想への橋渡しがなされていない。本論文の筆者はこれらのテーマについてもすでにいくつかの著作を発表しているが、本論文においては何よりも、これらのテーマとの結びつきについてほとんど立ち入った説明がなかった点が惜しまれる。筆者が今後、さらに大きな視野の下で解釈されるニーチェ論を展開することを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるも

のと認められる。なお、平成24年9月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。